

PROPOSAL

学びの場としての私設図書館の可能性

みんなの図書館さんかく館長 土肥潤也

みんなの図書館さんかく（以下、さんかく）は、静岡県焼津市の焼津駅前通り商店街の空き店舗を活用して、開館した私設図書館です。人口減・税収減の現代だからこそ、市民参画（さんかく）による公共空間づくりが求められています。さんかくはそんな思いを背景に、「私設公共」のコンセプトを掲げ、2020年3月にオープンしました。

みんなの図書館さんかく（以下、さんかく）は、静岡県焼津市の焼津駅前通り商店街の空き店舗を活用して、開館した私設図書館です。人口減・税収減の現代だからこそ、市民参画（さんかく）による公共空間づくりが求められています。さんかくはそんな思いを背景に、「私設公共」のコンセプトを掲げ、2020年3月にオープンしました。

さんかくの大きな特徴は、「一箱本棚オーナー制度」と呼ばれるシェア型図書館の仕組みを導入していることです。本棚オーナーは、月々2,000円を支払うことでマイ本棚を持つことができ、自分の思い思いの本を棚に並べることができます。利用者は、一般の公立図書館とは一風変わった個性的な本棚から本を自由に借りることができます。なお、本を借りることができる利用登録は300円が最初にかかり、その後はずっと無料です。

毎月2,000円を支払うだけで、まったく本棚オーナーにとってメリット

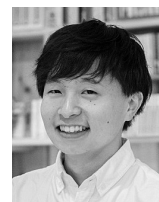
もともとおでん屋さんを営んでいた店舗が十数年空き店舗になっていたところに、「私設の図書館をつくりたい！」と大家さんに直接相談を持ちかけ、実験的に取り組みはじめたのがさんかくです。大家さんからは「まずは1年やってみな」という話でしたが、ありが

たいに既に3年以上運営できたり、徐々に地域の居場所として根付きつつあります。

がないようにも感じる仕組みですが、ありがたいことに現在は60名を超える登録があり、一時はキャンセル待ちがでるほどの人気ぶりです。

本棚はある意味で自己表現のボックスになっています。本棚オーナーは、本を置くことを通じて、自分の好きなことや関心のあることを世の中に発信します。本には感想カードを添えていて、借りた方からの感想を自由に書き込めるようにしています。「とっても感動した」「楽しく読み進めることができました」など、さまざまな感想が寄せられます。こうしたメッセージを読むのも本棚オーナーの楽しみのひとつです。

自分の趣味や好きなこと、興味のあ



土肥 潤也
（どひ じゅんや）
1995年、静岡県焼津市生まれ。早稲田大学社会科学部研究科修士課程修了、修士（社会科学）。2015年に、NPO法人わかものまちはを設立。2020年に、一般社団法人トリナスを共同創業、現在は代表理事。焼津駅前通り商店街をフィールドに、完全民営の私設図書館「みんなの図書館さんかく」を開館。こども家庭庁子ども家庭審議会議員。

特集：まちの学びのスポット



も共感を得られることは少ないでしょう。しかし、さんかくに本棚を置いていけば、誰かが反応してくれそうです。もちろん本のテーマや内容によって、すぐに反応が得られるものもあれば、1年以上かかるものもあります。が、これまでの経験上、必ず誰かが興味を示してくれます。

そんな風に仲間づくりに繋がっていくのもさんかくの大きな特徴です。例えば、趣味がミニ四駆という本棚オーナーさんが、ミニ四駆と関連する書籍を置かれていました。そんな時、たまたま子ども向けにミニ四駆大会を企画したいと考えている方が本棚を見つ

け、その場で意気投合。実際に子ども向けのミニ四駆大会を開催することになりました。本棚にミニ四駆を置いていなかったらこんなことに発展することとはなかったでしょう。

このように予想外の出会いや繋がりを生み出すのがさんかくのおもしろさであり、お金には変えられない価値がたくさん生まれています。さんかくが開館してすぐに緊急事態宣言が出され、スタートダッシュをコロナ禍で過ぎてきました。人と人の出会いが遮断された期間だったからこそ、日常の中の繋がりがコミュニティの重要性を見直す時間になりました。そんな中で開館したからこそ、多くの人に賛同を得られた側面もあったのではないかと振り返っています。

このように図書館を運営していると、その場所を使って学びの場をつくりたいという方も集まるようになり、さまざまな講座が企画されるようになりました。私たちはこれらを勝手に「さんかく大学」と名付け、自由に講座を主催できるようにしています。

筆ペン教室、読書会、フェルト教室、刺繍教室、絵本の読み聞かせ、工作ワ

ークシヨップなど、その講座の内容も多様です。本棚がずらつと並ぶ空間は、知的な雰囲気が高い、そんな環境で学ぶことができるのも好評のようです。

また、さんかくはとっても狭いスペースで、およそ10名が座ると満員です。狭いからこそ、大衆受けしないニッチなテーマの講座が企画されていて、少人数で狭く深く学んでいきます。人数が少ないからこそ、参加者同士が強く繋がることできるし、関係性も深まります。

世の中で開催されている講座は、大抵の場合、たくさんの方が集まることの良いこととされます。しかし、実は大人数が参加する講座だと、その後も参加者同士が繋がっていくことは難しく、その場限りになってしまうことがほとんどです。もちろんそうした講座が悪いわけではありませんが、参加者同士の学びが深まり、今後の関係性にも発展していく可能性があるのは、狭く深く学ぶ場なのかもしれません。

ですからさんかく大学では、「100人が1回よりも、10人が10回集まる学びの場をつくらう」をスローガンにしています。10人が10回ということは、

主催者は10回も講座を企画しなければいけないのですが、10人程度が集まる講座なので、100人集まる講座に比べれば、はるかに準備が気軽です。むしろ気軽だからこそ、何回も企画することが出来ます。

まちのあちこちで学びの場が展開されているまちは、市民にとって豊かなまちだと感じます。今日はこのテーマ、明日はあつちの講座と、多様な学び場を選ぶことができ、そこで繋がった市民同士がさらに新たな学び場をつくっていくのが理想的です。そのためには、ひとりの人が講座をたくさん企画するよりも、さまざまな市民が主人公となって、講座の企画者になっていくことが重要です。

さんかくの本棚オーナーの仕組みは、棚を持つ行為を通じて、場へのオーナーシップを引き出し、学びの場の主催者へと昇華させていく効果もあると感じています。もともと講座を企画するような人ではなかったのに、本棚オーナーになることで自分の好きを伝える自信が湧き、気がつくとなら学びの場を開いています。そして、そんな雰囲気が漂っているさんかくだからこそ、学び

の場を開きたいと考える人が集まってくるのです。

北欧を中心に「スタディサークル」という活動が広がっています。誰か先生がいるわけではなく、市民が特定のテーマについて学び合うためのサークルを立ち上げる活動です。スタディサークルを立ち上げると、まちの公共施設を無料で利用することができ、場所によっては助成金などの金銭的な支援もあるそうです。学び続ける市民をまちが支援し、より学びやすい環境が整っています。

さんかくでの学びの場は、この「スタディサークル」の考え方を基盤に置いています。もちろん助成金を出すことはできませんが、人々が学びやすい環境を提供し、繋がりが合う場をまちに生み出しています。それは必ずしもビジネスなどの実利的な学びではなく、自分の趣味や好きなことなど、それぞれが心から学びたいと思えるテーマであることも重要です。

自分自身が学びの場を開いていくことはもちろん、市民の学びが立ち上がりやすい環境をつくり出していくことも、学びのスポットを地域に生み出す

特集：まちの学びのスポット



ポイントです。そして、学び続ける市民がいることが、結果的にまちの持続性を高め、それがまちの豊かさにも繋がってきます。

さんかくが開館してから、「この仕組みを真似したい！」と多くの方が視察に来てくださるようになりました。一箱本棚オーナー型のシェア図書館を「みんなとしょ」と名付け、現在では同様の仕組みを取り入れた姉妹館が全国60館以上に広がりました。本棚オーナーは全国2500名以上となり、驚くほどの波及です。「みんなとしょ」

の活動に限らず、自分たちで手作りする公共空間である「私設公共空間」は、あちこちに広がりはじめています。喫茶店とランドリーを合体させた「喫茶ランドリー」は有名ですし、公園の民営化を進めるPark-PFI（公募設置管理制度）の推進によって市民参画の公園づくりもはじまっています。

このような活動は、市民主体のまちづくりという意味だけでなく、まち中に学びの場を増やしていく意味でも重要です。とはいえ、いきなり拠点をつくるのは難しいことで、全員がこのような場をつくった方が良いとは考えていません。むしろ、すでに地域の中にある拠点をうまく使いこなしながら、学びの場を開く人の存在も求められます。

まずは小さな活動からでも、学びのスポットを地域につくり、最終的には地域の中でたくさんさんの学びのスポットが立ち上がっていくような環境づくりを進めていきましょう。